

◇江戸遺跡研究会第96回特別例会は、2004年7月10日(土)午後1時00分より江戸東京博物館学習◇
◇室にて行われ、松本 勝氏、山口剛志氏、渡辺一氏より、以下の内容が報告されました。 ◇

千葉県岩富城跡（岩富寺遺跡）の発掘調査成果 —山岳霊場と中世城郭の発掘調査—

松本 勝

(君津郡市文化財センター)

はじめに

岩富城跡は千葉県富津市大字かめざわ亀沢と君津市大字やまたかはら山高原の境界部分、最高位の標高が115mを計測するやせ尾根丘陵上に所在する、寺院跡と中世城郭の複合遺跡である。

ここには現在、新義真言宗智山派に属する妙覚山岩富寺が所在し、現在でも檀家40軒の菩提寺として存続している。寺院は第2図のとおり、断崖絶壁上のほぼ山頂部に立地しており、周囲の奇岩、古木などを含め、現在でも「霊場」としてのおもむきを十分残す興味深い寺院のひとつといえる。

また、周囲は鬱蒼とした照葉樹林およびモウソウ竹林がひろがり、頂部からはさらにその先の眺望が極めて良好である。ここからはマザー牧場で有名な鬼泪山きなだやま、富津岬周辺から浦賀水道をこえ、対岸の三浦半島、伊豆大島なども広く見渡せる絶好のロケーションであり、鬼泪山からつらなる房総屈指の山岳霊場寺院である鹿野山神野寺かのうざんじんやじ（君津市）には、林道を経て南東5kmほどで到達する。

今回、岩富寺を含む190,000㎡という広大な敷地に対して霊園造成する開発計画があり、そのうちの遺跡内における斜面などをのぞく調査可能箇所、13,200㎡を対象に平成15年度に（財）君津郡市文化財センターが発掘調査を実施した。

最初に5・6月を主体に確認調査を実施し、7月に確認調査成果の報告書作成を実施した。そして同年11月下旬から3月上旬まで本調査を実施し、本調査の整理作業は基礎的整理を3月末にすすめているものの、実測を含む本格的な整理作業は平成16年7月から再開したばかりで、その点ではわずかな情報しか得られていない。

したがって、今回の報告では確認調査成果に重点を置き、本調査で得られた成果については断片的ではあるが、補足的に途中経過として付け加えておきたい。

1. 古代の様相

岩富寺は市境に位置する寺院であるが、境内の主要部は富津市に属しており、『富津市史 通史』

によれば、当寺は市中でも一番古い歴史を持つ寺院と位置付けられている(註1)。その開基は斉明天皇6年(660)と群を抜く古さではあるが、これらは寺伝や縁起類によるもので、信憑性はない。

ところが、今回の調査によって当寺からは8世紀代の布目瓦片が1点出土したのを最古資料とし、そのほか9世紀代に位置付けられる土師器香炉蓋、9世紀後半ないしは10世紀代を中心とする土師器坏、土師器足高高台、須恵器、灰釉陶器などが北側のⅠ-10郭や南東側のⅡ-4郭(第3図)から出土しており、おそらく古代から継続する山岳寺院である可能性が極めて高くなった。

残念ながら古代の遺構は少なく、香炉蓋が出土した斜面上位から10世紀の土師器坏をともなう木炭および焼土層を1ヵ所確認した。確証はないがこれは修法壇の痕跡であった可能性がある(註2)。

2. 中世の様相

さらに、時代は下って、少なくとも13世紀後半以降には機能していたであろうと考えられる、集石火葬墓および廟堂(墳墓堂)跡を山頂部の平場(Ⅰ-1郭)にて検出した。

この平場はとくに西側の眺望の良好な勝地として位置付けられる場所であり、厳寒期の1・2月頃には富津洲、浦賀水道越しに横須賀周辺の海浜部や、箱根・丹沢連峰や富士山がみわたせる。

この平場は痩せ尾根斜面を削り、壁と底面がほぼ垂直になるように構築しており、横浜市の上行寺東やぐら群を想像させるような精巧な人工的岩盤整形面である。

集石火葬墓・墳墓堂からは12世紀後半頃の常滑三筋壺の破片を最古資料とし、13世紀後半～14世紀前半に位置付けられる常滑不識広口壺(蔵骨器)や同時期のかわらけ、15世紀代の可能性がある常滑不識広口壺(蔵骨器)が出土し、おびただしい数が出土した玉石の中には、法華経譬喩品、あるいは“南無阿弥陀仏”と称名念仏名号が墨書された多字経石が数点含まれていた。

火葬墓の所在する空間には、廟堂として機能したであろう数棟の掘立柱建物跡が存在し、垂直な壁に直面した南西側が墓の主体であり、同時にここが廟堂の中心として機能していたものとする。

蔵骨器からは成人のものとする焼骨を検出し、そのほか数基のピット内などからも焼骨が出土した。このことから、数代にわたる僧侶の蔵骨・改葬・供養儀礼が繰り返され、廟堂が維持・管理されていたものと想定する。おそらく15世紀代と想定する常滑窯産の蔵骨器(第3図右上)はこの中での最新資料と考えられ、造墓の終焉は15世紀以降と想定できる。

さて、かわらけを中心とする該期の遺物は南側の斜面部からも比較的多く出土しており、中世段階では寺院全体が山岳霊場、あるいは納骨霊場として機能した聖地空間であり、「堂ノ下」へ下る南側斜面部が寺の表参道であった可能性がある。

3. 中世末から近世初頭の様相

戦国時代の遺構として、曲輪として利用された可能性のある平場や堀切などを検出している。堀切については、今回調査できなかったものも含めて7条確認した。これらは寺域を圍繞するように同心円状に存在しており、あたかも寺の結界を示しているよううかがえる(第2図)。

さらにこの堀切については、対象となった3条についての調査の結果、すべてに畝状の「仕切り」が設けられた技巧的なもので、広義の「障子堀」と同様の位置付けができるものである。

また、この時期に構築されたであろう平場としては、おそらく南東側のⅡ-1～3郭があり、その周辺を中心に該期の遺物が出土している。

出土遺物は瀬戸播鉢、常滑製品などが主体で、出土量としては少ない。現時点での概要としてはおおむね、古瀬戸後期様式の後半から大窯期が主体であり、その他17世紀前半から中葉に位置付けられる志野皿および瀬戸灰釉皿も同様の場所から出土していた(第5図-42、43と同様の資料)。

そのなかで興味深いのは南東側のⅡ-4郭の成果である。ここからは10世紀代を中心とする多量の遺物が出土しており、古代における山林修行の場として機能していた平場が戦国期から近世初頭段階にも何らかの形で利用されていたことが確認でき、該期のかかわり、志野皿などが出土した。

4. 近世～明治期の様相

史料裏付けはないが、『君津郡誌』(大正15年編纂)に記載された寺伝資料によると、寺は古代以降、数度にわたる盛衰を経験したものの、元禄十六年(1703)にいたって、僧秀海しゅうかいが登場し、岩富寺の復興事業が行われ、新義真言宗智山派寺院として隆盛する基礎が築かれたとされ、彼自身が岩富寺の中興として位置付けられている。おそらくこの頃から庶民を対象とし、祈祷寺的な意味合いを持つ修験的巡礼霊場システムが整えられ、発展にむかっていったことが想像できるが、それを裏付けるように、18世紀後半以降、明治時代頃までの遺構・遺物が充実している。

しかし、その場所は現寺院が所在する北側を中心とする周辺で完結しており、「オクノイン」と伝えられる寺院背後(第2図)では、該期の様相は極めて希薄であった。

その中でも寺院前面に所在するⅠ-6、7郭の調査成果がとくに興味深い。多数検出された掘立柱建物跡は16世紀代のもものとされる1棟をのぞいて、ほとんど江戸後期以降のものであり、明治期頃までおそらく何度も建てかえられながらも維持された建物であったと想像できる。

伝承ではかつての岩富寺は多数の坊や院のある伽藍が充実した寺院であったとされ、同時に沙弥僧のための修行寺院であったとされている。そのため、参道沿いの小さい平場には、袈裟などの装束を売る店をはじめ、多くの店が軒を連ねていたといわれている。

近世遺物の組成については現在分析中であるが、磁器碗や皿などは比較的等質的な汎用品が多く、その他瀬戸・信楽を中心とする徳利、堺・明石系の播鉢、あるいは土瓶・灯明具など、一般的集落と同様の遺物が多数出土している。そのほか多種香炉、瀬戸・美濃仏花瓶、あるいは陶器・磁器の仏飯器、瀬戸瘦瓶などは、ある意味では寺院に関するものにとらえられようが、明確な仏具、什器などはほとんど出土しなかった。

等質的な汎用品が多く出土している点では寺院関連より、むしろ参拝客を対象とした茶店などの店舗、あるいは宿坊などの施設、もしくは檀家信徒の法会などの場があった可能性が指摘できる。

そして、その中心部分に位置する小型土坑(Ⅰ-6郭SK-008)からは、明治期の印判磁器を

最新資料とする陶磁器類やワインボトルなど 19 世紀代の遺物が狭い範囲で多く出土した。その多くが遺存良好であり、完形で残る陶磁器類も多く出土している。このことは、明治期の段階で一括廃棄せざるをえない状況が読み取れ、ここにもひとつの画期があったことが想像できる。

さて、近世以降の歴代住職墓については、観音堂背後の鬱蒼とした崖下に展開しており、この墓域については現住職の法系にあり、取り扱いの問題で調査にいたることがなかったが、石塔あるいは墓標の銘文から考えるならばこの中では正保 3 年（1646）「宥カ榮」と書かれた一石五輪塔が最古であり、以降昭和期まで連続とその系譜が連なることが確認できる。

とくにこのなかでは幕末頃の石塔・墓標がきわめて大型であり、その隆盛期を垣間見せるものとなった。この法灯の推移については今後史料調査などをしていく予定であるが、新義真言宗としての岩富寺の歴史を把握できる資料のひとつであると考えられる。

そのほか近世の檀家墓は境内地には極めて少なく、寺域北端部に江戸後期ころのものがわずかに存在するのみで、そのほか近代以降の檀家墓が観音堂裏に 4 基ほど確認できるのみである。また、調査によっても墓とみなされる遺構は存在しなかった。墓地の分布からみても、岩富寺は近世において（巡礼）霊場、ないしは祈祷寺として機能していたものととらえることが可能である。

5. 近代後半以降の様相

江戸後期をピークとする遺物の出土量は、明治を過ぎて激減し、極めて少なくなる傾向はいなめない。当然これらは現寺院内部に保存されていることも加味して考えなければならないが、相対的には極めて少ない量である。

岩富寺は太平洋戦争時に米軍の空爆（誤爆）を被り、平安仏とされる千手観音像が安置される観音堂が全焼し、壊滅的ダメージをうけたという。この観音堂跡が I - 2 郭に残る円形の基壇跡（第 3 図）であり、その前面に仮堂が建てられ、後継の千手観音像（客仏？）が安置されている。そして戦後数年を経て当寺は兼務寺院となり、実質無住となった。

6. 現時点での岩富寺の歴史的位置付け

岩富寺は古代からの街道の要衝にあり、奈良時代に創建された君津市の九十九坊廃寺から郡集落を経て、富津市佐貫集落、あるいは鹿野山、そして富津岬方面への尾根道ルートの分岐点に位置する寺院である。よって古代から重要な場所であったことは明確であり、その寺域については閑寂な仏教的山林修行の場としても位置付けできるものである。その盛期は遺物の充実する 10 世紀代であり、各平場に小堂宇が建てられ、修行が行われていたものと推定する。

中世になると、12 世紀の末もしくは 13 世紀代において、当寺が復興あるいは継続によって、納骨聖地として再び充実しはじめる。この頃、鹿野山神野寺、清澄山清澄寺などといった有力な山岳寺院は天台宗に属しており、中世後半段階で急激に勢力を増した新義真言宗（醍醐寺三寶院）の末寺に変化していることが確認されている。

岩富寺についても、集石火葬墓から出土した多字経石に書かれた「法華経」の経文の存在などから天台宗系の寺院であった可能性は高く、僧侶集団が中心となり、壇越、地域民衆などによって、眺望の良好な丘陵最高位が平場に造成され、逝去した先師の菩提を弔い、供養する墳墓堂（廟堂）が築かれ、その後、歴代住持を弔う納骨聖地空間として機能していったと考える。

寺院のレイアウトは近世以降に大きく変えられている可能性もあり、そのため中世の遺構は希薄であるが、おそらく現寺院周辺が当時からその中枢として機能していたと想定できる（註3）。

戦国期には寺は城塞化しているが、これは近隣城郭の文献研究成果などから類推（註4）するならば、おそらく寺院勢力自身が武装していたのではなく、隣接した場所に上総佐貫城という拠点城郭があり、物資海上輸送の拠点である富津湊も至近距離で、なおかつこれらへの眺望も良好な利点から、里見氏あるいは北条氏といった広域権力によってこの地域が重要視され、同時に山岳寺院勢力のノウハウを吸収すべく、広域権力と寺院勢力の妥協により城塞化した可能性がある。

時代は近世にいたり、近世初頭段階においても城郭の様相は継続している可能性は指摘できるものの、寺院は小規模ながら継続していたのではないかと現時点では考えている（註5）。

18世紀後半以降においては、当寺は巡礼霊場、あるいは祈祷寺として庶民的な信仰の場として比較的短期間に隆盛したものとみられ、おもにその中心部が広く再造成されたものと想定する。

同時に、確認調査においてのみ調査に着手した、谷部分に位置する「堂ノ下」（第2図）中段の大型平場からは、トレンチ調査とはいえ、極めて多量の陶磁器が出土した。しかし、出土土層が一定しておらず、これらは何らかの廃棄にともなう遺物であることが読み取れた。おそらく崖の上位に位置する寺院境内から近代の前半頃に土砂ごと廃棄されていたものと考えられるが、そのことを加味してもかなり多量の陶磁器を確保した施設が存在したものと想定できる。

近代の状況としては、明治期において何らかのダメージがあったものの、大型寺院として存続し、太平洋戦争においての空爆をへて現在にいたっている。

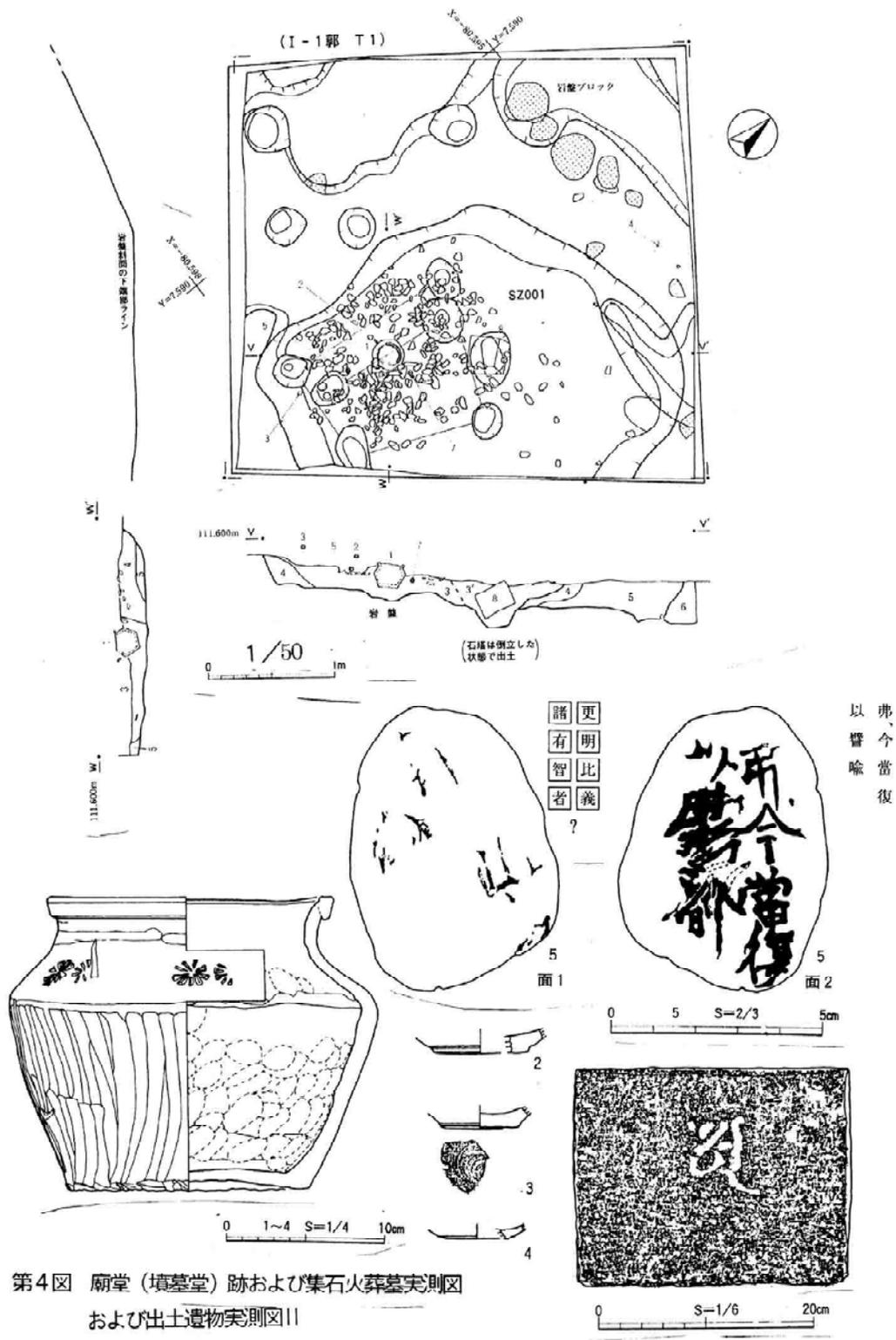
また、廟堂跡・集石火葬墓の調査成果、あるいは近世以降の歴代住職墓の石塔、墓標のあり方から現時点での流れを総括するならば、前述のとおり、遅くとも当寺は13世紀代ころには天台宗系の山岳寺院として機能しており、勸進活動、壇越の支援、地域住民の信仰を得て発展し、戦国時代前後（15世紀後半～16世紀代）の段階で、真言宗智山派の前身である醍醐寺三宝院系統の集団との勢力交替があった。これが歴代住職墓の系譜にあたり、彼らの活動により18世紀の段階で上総国観音巡礼霊場などに整備されることによって発展し、それが明治期まで存続した。その後やや衰退するものの、戦前までその痕跡が残っていたものとする。

さて、現在は本格的な整理作業に着手しはじめたばかりであり（報告書は今年度刊行）、断片的でしか岩富寺の実像を把握しきれていない。今後は掘立柱建物跡などの遺構の微細な検討、分析をすすめて、遺物の組成などについてももう少しふみこんで検証してみたいと考えている。さらに近隣に所在する中本山寺院を含む寺院の調査、地方寺院の勢力史、思想史などについても考えてみる予定

である。課題は山積みである。今後、いろいろな面でご教示いただければ幸いである。

【註】

- (1) 岩富寺から北側の峠を越え、小糸川を渡った君津市南子安には、大型の古代寺院である九十九坊廃寺跡があり、そこへいたる街道沿いの遺跡からは9世紀代の緑釉浄瓶など奈良・平安時代における仏教関係の遺物が出土している。このことから、岩富寺は遅くとも平安時代の段階で、古代的な山岳寺院として機能していた可能性はある。
- (2) 土師器を含む木炭・焼土層を検出した平場（I－10郭）の北東1,500mには、聖徳太子が護摩を焚いたと地域に伝承される「馬王台」^{まおうだい}（第2図）が所在し、下山ルートに所在するという位置関係からも何らかの関連性がうかがわれる（ちなみに馬王台については、その平場は事業対象外であるので調査は実施しなかった）。
- (3) 観音堂（仮堂）の所在するI－2郭の窪地部分から13世紀後半以降、14世紀前半に位置するかわらけが1点のみ出土した。
- (4) 佐藤博信 「妙本寺と房総里見氏」『中世東国日蓮宗寺院の研究』2004 東京大学出版会
- (5) 寺院周辺からの近世遺物出土の状況や、当寺に直接関わるのか問題ではあるが、文中にて説明した正保三年銘の一石五輪塔の実例などから想定した。



第4図 廟堂（墳墓堂）跡および集石火葬墓実測図
および出土遺物実測図II

小田原城における近年の発掘調査成果

山口 剛志

(小田原市教育委員会)

はじめに

小田原城では、昭和46年（1971）小田原城本丸・二の丸における試掘調査を最初として、平成14年度までの32年間で192地点もの発掘調査が実施されている。これらの成果については、既に一定の成果が提示されているが（塚田ほか1995など）、ここでは、小田原城における近年の発掘調査の中で特に注目される成果について遺構・遺物別に紹介し、考古学からみた小田原城を改めて考えてみたい。

1. 小田原城の概要

(1) 小田原城の立地と環境

小田原城は、神奈川県西部に位置する小田原市の中央やや西寄りに所在する。地形的には、箱根外輪山から派生した台地の先端縁辺部に位置し、城の南西には早川、北東には山王川と酒匂川が流れ、南東は相模湾に面しており、自然地形を巧みに利用した立地となっている（第1図）。

小田原城の城域は、西端の標高123.8mを測る小峯御鐘ノ台^{こみねおかねのだい}を頂点として、そこから派生する三本の丘陵と相模湾に面した標高10m前後の沖積低地とからなっている。これらを、堀と土塁からなる周囲約9kmの総構^{そうがまえ}（大外郭）が巡っており、城内はもとより城下までをも取り込んでいる。この総構は、北条氏が天正18年（1590）の豊臣秀吉による小田原攻めに備えて構築したものであり、この総構の存在こそ小田原城が中世城郭最大の城といわれる所以である。

(2) 小田原城の歴史

小田原城の起源については、応永23年（1416）上杉禅秀の乱の戦功によって大森頼春^{よりはる}が小田原に進出した以降のことと考えられているが、明確なことはわかっていない。この頃の小田原城は、標高68m前後を測る八幡山丘陵中腹の八幡山古郭にあったと想定されており、現在の神奈川県立小田原高等学校付近がここに相当する。

歴史的に明らかとなるのは、伊勢宗瑞^{そうずい}（北条早雲）が大森氏を破って小田原城を奪取したとされる明応5年（1496）から文亀元年（1501）以降のことである。これによって五代にわたる北条時代が始まり、二代氏綱^{うじつな}の時代から小田原城が本城となった。三代氏康^{うじやす}が関東一円にまで勢力を拡大しても、領国西端の小田原城はそのまま本城として発展し続けた。

天正15年（1587）以降、豊臣秀吉との対決姿勢を強めていった四代氏政^{うじまさ}・五代氏直^{うじなお}は、城下町・

宿場町をも取り込んだ堀と土塁からなる周囲約9kmの総構を造営した。一方、秀吉は、天正18年（1590）4月に石垣山一夜城を造営するなど長期戦の構えで小田原城を包圍し、小田原合戦が始まった。そして、その三箇月余り後の7月5日小田原城は開城し、秀吉による実質上の天下統一が達成された。

北条氏の後は、徳川家康旧来の家臣である大久保忠世^{ただよ}が天正18年（1590）4万5千石で入封した。そして、文禄3年（1594）には、その子忠隣^{ただちか}が6万5千石で城主となったが、慶長19年（1614）突如改易となって近江国に配流となった。

大久保忠隣改易後は、幕府が指名した譜代大名と旗本^{じょうぼん}が交代で城番^{ぼんじょう}をつとめた番城時代となった。その後、一旦は、元和5年（1619）阿部正次^{まさつぐ}が上総国大多喜より5万石で入封して城主となった。しかし、元和9年（1623）には再び武蔵国岩付へと転封となったため、小田原城は再び城主不在となった。

寛永9年（1632）、將軍家光の乳母をつとめた春日局の子であり、家光の側近でもあった稲葉正勝^{まさかつ}が下野国真岡より8万5千石で入封した。正勝^{まさのり}死後、子の正則が城主となり、11万7千石まで加増された。この稲葉氏の時代には、小田原城の近世化工事が本格的に行われ、現在みられる石垣を伴う小田原城が完成した。その後、天和3年（1683）には正則の子正通^{まさみち}が城主となるが、貞亨2年（1685）に越後国高田に転封となった。

貞亨3年（1686）、大久保忠朝^{ただとも}が下総国佐倉から10万3千石で入封し、72年ぶりに小田原城主に復帰した。石高は、元禄7年（1694）に11万3千石に加増されたが、これ以降幕末まで変わることはなかった。また、この時代は、災害の復興に明け暮れる日々を送ったため、藩の維持が精一杯の状態^まで明治維新を迎えることとなった。

明治3年（1870）小田原藩は、明治政府に対して廃城届を提出した。そして、天守閣・門・櫓など5棟の建物は、900両で民間に払い下げられて解体された。さらに、翌年の廃藩置県によって小田原藩政に完全に終止符が打たれ、小田原城の長い歴史に幕を閉じることとなったのである。

2. 遺構の成果

(1) 八幡山古郭

八幡山古郭は、初期の小田原城が存在したところと想定されているが、ここでは平成14年（2002）にかながわ考古学財団によって発掘調査が行われている（第1図1）。調査区の大部分は既に削平されていたが、中・近世では、藤原平南入堀^{ふじわらだいらみなみいりぼり}や直径約3.6mを測る小田原城最大の石組井戸（第2図）など、初期の小田原城を彷彿とさせるような遺構が検出されている（大上ほか2004）。現在、これらの遺構が重要であるという視点から神奈川県によって遺跡保存が検討されており、その動向が注目される。

(2) 本丸・二の丸

現在の小田原城は、本丸・二の丸の大部分と三の丸・総構の一部が国指定史跡となっているが、

この整備の一環として小田原市教育委員会が実施した二の丸の発掘調査が昭和57年（1982）以降断続的に行われている。この結果、住吉堀（中堀）（2）が16～17世紀の間に二度の大改修が行われたこと（第3図）（塚田ほか1995）、元禄16年（1703）の火災で焼失した藩主屋敷である二の丸御殿（3）の建物礎石が検出されたこと（大島1999）、馬屋曲輪・大腰掛（4）^{おおこしかけ}に関連する建物礎石・石組井戸などが検出されたことなど（大島2001・2002）、二の丸における史跡整備にとって重要な資料が多く得られた。

(3) 三の丸堀

三の丸東堀では、平成3年（1991）に玉川文化財研究所によって発掘調査が行われた第Ⅰ地点（5）において、三段に積まれた切石積石垣が検出された（第4図）（塚田ほか1995）。この石垣は、17世紀中葉と推定され、三の丸堀で初めての発見となった。さらに、第Ⅱ地点（6）では、平成3・4年（1991・92）に玉川文化財研究所によって発掘調査が行われ、先の三段に積まれた切石積石垣の下層から17世紀初頭前後と推定される玉石積石垣が検出された（第5図）（小林ほか1995）。この玉石積石垣の位置は、現在最古の城絵図である「加藤図」（1614～31年頃）の記述と一致することから、「加藤図」を再評価する資料ともなった。

三の丸南堀は、第Ⅰ～Ⅳ地点において石垣が検出されなかったが、平成11年（1999）に小田原市教育委員会が発掘調査を行った第Ⅴ・Ⅵ地点（7・8）では、三の丸東堀と同じく三段に積まれた切石積石垣が検出され、三の丸南堀にも石垣を構築していることが明らかとなった（佐々木ほか2002）。なお、三の丸北堀は、法面に石垣が構築された事例がまだ確認されていない。

(4) 総構（大外郭）

小田原城の最も外側の守りである総構は、堀と土塁が約9kmも延びる大規模な遺構である。平成13年（2001）に小田原市教育委員会が発掘調査を実施した伝肇寺西第Ⅰ地点（9）^{でんじょうじにし}では、初めて土塁と堀の全貌が明らかにされた（第6図）（山口ほか2004）。堀幅16.5m、堀底幅6.5m、深さ10.0mという非常に大規模な堀で、堀底には北条氏が積極的に取り入れた堀障子^{ほりしょうじ}と呼ばれる堀底を堰堤状に仕切った施設も確認されている。遺構の規模・構造から豊臣秀吉に対する北条氏の並々ならぬ対決姿勢が感じられ、大変興味深い遺構である。

(5) 城下

小田原城下では、平成14年（2002）に鎌倉遺跡調査会が発掘調査を行った筋違橋町遺跡第Ⅲ地点（10）^{すじかいばしちょう}において、慶長6年（1601）の宿駅制成立当初の東海道に相当する道路と石組水路が検出された（第7図）（降矢ほか2003）。筋違橋町付近の近世東海道は、現在の国道1号線下にあったとされていたが、その通説をくつがえす発見となった。

3. 遺物の成果

(1) 三の丸

まず、平成5・6年（1993・94）に玉川文化財研究所によって発掘調査が行われた藩校集成館跡^{はんこうしゅうせいかんあと}

第Ⅲ地点（11）において、当時最高級磁器である鍋島焼が多量に出土した（小林2000）。その内訳は、色絵七寸皿・六角皿、染付七寸皿・尺皿、青磁染付尺皿、青磁七寸皿であり、七寸皿は揃いの皿であった（第8図）。鍋島焼は、鍋島藩が將軍家への献上品や大名・公家などへの贈答品として製作したもので、一般には販売していない製品である。では、どうして小田原から出土したのだろうか。これに関連する史料として、鍋島藩七代藩主^{しげもち}重茂の年譜「重茂公御年譜」巻六の中に、明和2年（1765）国許に帰る途中病気で小田原に数十日とどまった時、小田原藩主大久保忠^{ただよし}由に大変お世話になった。そのお礼として陶器その他を進上した、とある（八幡ほか1987）。出土した鍋島焼がこの時のものかは別としても、小田原藩と鍋島藩の交流を示す遺物として重要である。

つぎに、平成2年（1990）に小田原市教育委員会が発掘調査を実施した大久保^{うたのすけていあと}雅楽介邸跡第Ⅵ地点（12）では、宝永4年（1707）の富士山噴火に伴うスコリア層中から多量の陶磁器が出土した（山口2000）。これらの遺物には、型紙摺・コンニャク印判・五弁花の装飾技法やくらわんか手と呼ばれる器種が認められ、1707年には既に出現していたものであることが検証された（第9図）。1707年下限の年代の確かな資料として肥前陶磁研究上重要な発見である。

（2）城 下

平成3・4年（1991・92）に小田原市教育委員会が発掘調査を行った本^{ほんちよう}町遺跡第Ⅰ地点（13）では、1580～90年代前半に属する^{わらばいゆう}藁灰^{きしだけい}釉の岸岳系唐津陶器窯の碗・皿が多量に出土した（第10図）（山口ほか2003）。小田原城では、唐津製品の出土が非常に少ない傾向にあるため、このような初期段階の製品が多量に出土したことは、小田原城はもとより太平洋沿岸地域における岸岳系唐津製品の流通を探る上で貴重な発見である。現段階では、豊臣秀吉の朝鮮出征である文禄元年（1592）の文禄の役に大久保忠隣が肥前名護屋城まで出陣していることから、この時に小田原にもたらされたと推定しておきたい。

平成6年（1994）に小田原市教育委員会が発掘調査を行った^{らんかんぼしちよう}欄干橋町遺跡第Ⅳ地点（14）では、16～19世紀の遺構・遺物が多数検出されたが、特に19世紀初頭の国産陶磁器とともに中国徳化窯系色絵碗が多数出土していることは注目される（第11図）（山口ほか1998）。

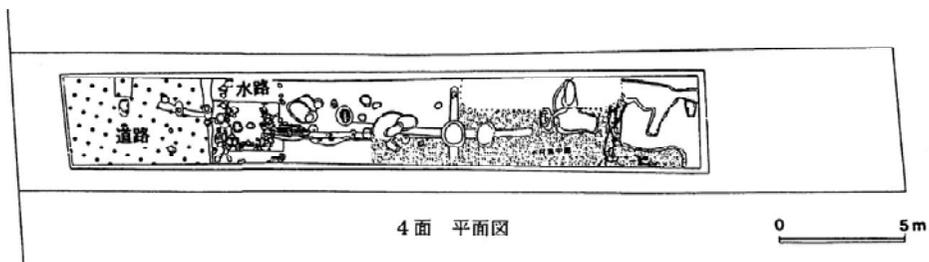
最後に、平成9年（1997）に小田原市教育委員会によって発掘調査された欄干橋町遺跡第Ⅴ地点（15）では、^{かんざし}ガラス製^{こうがい}簪・筭の破片が77点も出土した（第12図）（諏訪間ほか1999）。これらの製品が非常に多く出土したこと、調査地が飯盛女を置いていた旅籠に相当することから、19世紀に旅籠で働く飯盛女の装飾品であろうと推定されている。

おわりに

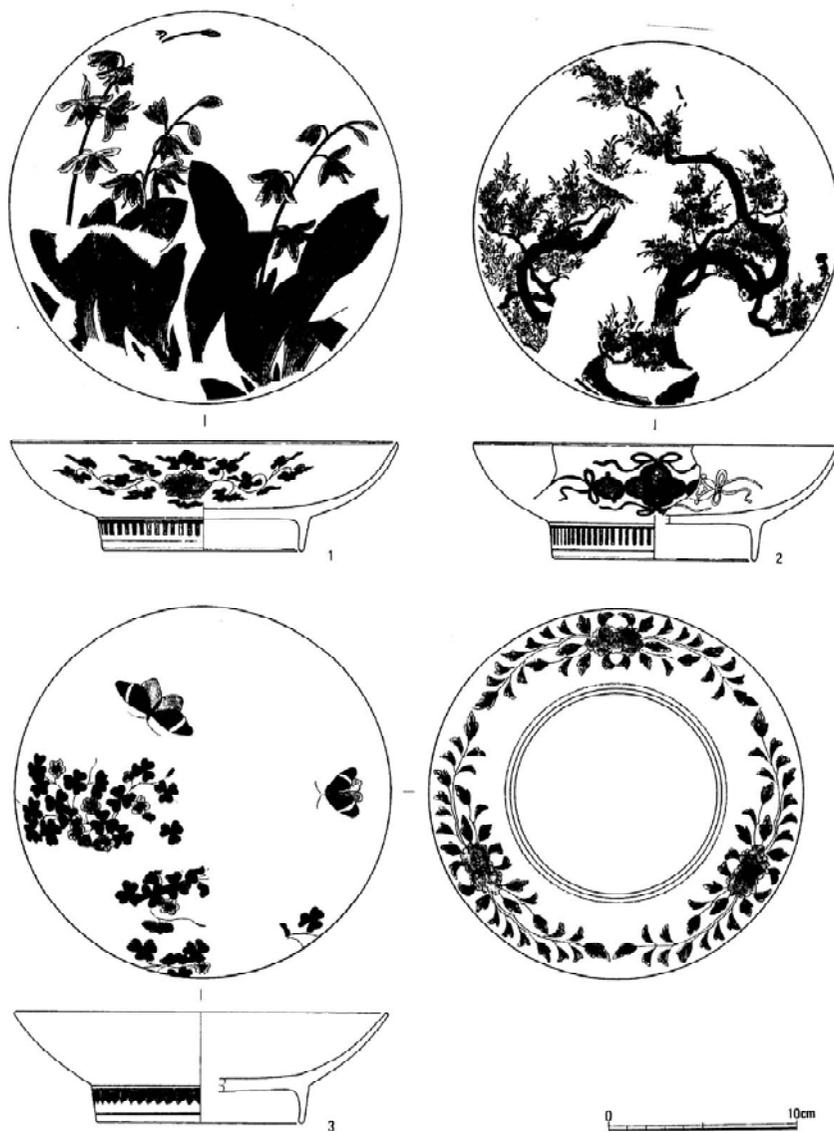
以上のように、小田原城における近年の発掘調査成果を概観してきた。小田原城においても、近年新たな知見が多く蓄積されていることが改めて理解できた。今後は、これらの考古資料を基礎にした小田原の歴史をどのように再構築するのか、また、考古資料から見た小田原の歴史を一般市民にどのように普及させたら良いかなど、さまざまな努力が求められている時期にきているであろう。

引用文献

- 大上周三ほか 2004 『小田原城跡八幡山遺構群Ⅱ』 かながわ考古学財団調査報告161、かながわ考古学財団
- 大島慎一 1999 『史跡小田原城跡二の丸御殿跡試掘調査の概要』 小田原市文化財調査報告書第76集、小田原市教育委員会
- 大島慎一 2001 「史跡小田原城跡馬屋・大腰掛跡の調査」『平成13年小田原市遺跡調査発表会・シンポジウム弥生後期のヒトの移動－相模湾から広がる世界－発表要旨』 小田原市教育委員会
- 大島慎一 2002 「史跡小田原城跡馬屋・大腰掛跡」『平成14年小田原市遺跡調査発表会発表要旨』 小田原市教育委員会
- 小林義典 2000 『小田原城三の丸藩校集成館跡第Ⅲ・Ⅳ地点』 小田原市文化財調査報告書第100集、小田原市教育委員会
- 小林義典ほか 1995 『小田原城三の丸東堀第2地点発掘調査報告書』 東京電力株式会社・玉川文化財研究所
- 佐々木健策ほか 2002 『小田原城三の丸南堀第Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ地点』 小田原市文化財調査報告書第93集、小田原市教育委員会
- 諏訪間順ほか 1999 『小田原城下欄干橋町遺跡第Ⅴ地点』 小田原市文化財調査報告書第71集、小田原市教育委員会
- 塚田順正ほか 1995 「発掘調査の成果にみる小田原城」『小田原市史』別編城郭、小田原市
- 降矢順子ほか 2003 「小田原城下筋違橋町遺跡第Ⅲ地点」『平成15年小田原市遺跡調査発表会発表要旨』 小田原市教育委員会
- 八幡義信ほか 1987 『鍋島一藩窯から現代まで』 神奈川県立博物館
- 山口剛志 2000 『小田原城三の丸大久保雅楽介邸跡第Ⅵ地点』 小田原市文化財調査報告書第80集、小田原市教育委員会
- 山口剛志ほか 1998 『小田原城下欄干橋町遺跡第Ⅳ地点』 小田原市文化財調査報告書第67集、小田原市教育委員会
- 山口剛志ほか 2003 『小田原城下本町遺跡第Ⅰ地点』 小田原市文化財調査報告書第109集、小田原市教育委員会
- 山口剛志ほか 2004 『小田原城総構伝肇寺西第Ⅰ地点』 小田原市文化財調査報告書第118集、小田原市教育委員会



第7図 筋違橋町遺跡第Ⅲ地点道路・石組水路 (1/300) (降矢ほか2003)



第8図 藩校集成館跡第Ⅲ地点64号土坑出土鍋島七寸皿 (1/4) (小林ほか2000)

熊井焼の成立と展開

渡辺 一

(鳩山町教育委員会)

はじめに

1 熊井焼の地理的・歴史的環境

(1) 古代窯業地に立地

所在地：鳩山町大字熊井（旧武蔵国比企郡上熊井村沖ノ田）

南比企丘陵の内陸 丘陵の裾（谷の隙）

須恵器・瓦の生産地 中世窯業の候補地 豊富な資源（粘土・燃料材）

(2) 江戸時代の支配関係

幕領（代官支配）一旗本領（本田・内藤・山田）

(3) 交通関係

陸上交通：川越道、観音街道＝巡礼道（慈光寺－正法寺）

河川交通：越辺川（今宿河岸）－入間川－荒川（江戸）

2 熊井焼の歴史

- ・開窯（天明五年・1785年）『五品共進会内国博覧会 陶器論稿 上』
- ・閉窯（昭和38年・1963年）
- ・根岸家歴代陶工
（初代）仙之助～（2代）儀兵衛～（3代）喜一～（4代）豊三～（5代）茂～
（6代）茂平治～（現当主）一郎（6代と瓦操業に従事）
- ・操業の変遷

熊井焼の歴史 (『五品共進会内国博覧会 陶器解説 上』、昭和53年新聞記事より作成)

初代 仙之助 1785年 (天明5年)	2代 儀兵衛 1819・20年頃 (文政2・3年)	3代 喜一 1830年頃 (天保末年)	4代 豊三 1885年頃 (明治18年)	5代 茂 1930年頃 (昭和初期)	6代 茂平治 1963年 昭和38年
楽焼 淡路国医師より 伝習 実体不明	楽焼 実体不明	唐津焼陶工来 焼造失敗 廃業寸前 京焼修行 事業再建	事業拡大 明治初期:年間 土器1万5千個 (25両)	瓦・土管に転業	瓦専業 廃業(S.38)

3 熊井焼窯跡の確認調査

(1) 窯跡の確認状態

- ・明治期の改造により陶器窯は窯体を失う。
- ・改造窯はロストル式か (詳細不詳)。
- ・陶器窯段階と思われる窯体脇に接続する通路状硬化面を確認。

(2) 遺物の出土状態

- ・通路状硬化面下位に物原を確認。
- ・物原は深さ1.2mまで確認。

表土層 (瓦) - I層 (土管・土器) - II層 (硬質陶器) - (III層・軟質陶器?)。

4 出土遺物の概要

(1) 器種の概要

a 陶器

- ・種類 皿類、皿・鉢類、鉢類、蓋類、鍋類、坏類、合子、土瓶・急須類、徳利、香炉、餌猪口、ひょうそく、ミニチュア、花生、壺・甕類、甌、ほか
- ・特徴 鍋類 (片手鍋・両手鍋) が多い。一部楽焼風を含む。

b 土器類 (赤焼き品類)

- ・種類 火鉢、焜炉、焙烙、椀、胞衣壺、甕、ほか

c 瓦質土器類

- ・種類 火鉢、鉢形、焜炉、ほか (祠など)

d 焼き締め品

e 土管

f 窯道具

(2) 技法概観

- a 施釉 (灰釉、鉄釉、灰白色釉主体)
- b 装飾 (イッチン、飛鉋、染付、筆描、貼付文など)

5 熊井焼を巡る諸問題 (メモ)

(1) 武蔵国近世・近代窯における熊井焼の位置

- ・軟質陶器 (楽焼) 段階 青梅の近世窯
- ・硬質陶器段階 飯能焼、山王焼ほか諸窯
- ・土器段階 多摩のヒバチヤ 江戸のやきもの

(2) 熊井焼と飯能焼・山王焼について

飯能焼・山王焼対比表

	飯能焼 (原窯跡)	山王焼
所在地	飯能市八幡町 (旧武蔵国高麗郡真能寺村原)	東松山市日吉町
立地	飯能台地の平坦地	松山台地の平坦地
支配	沼田藩主黒田氏領地	川越藩松平氏領地
交通	飯能-寄居線旧道 [日高~越生→熊井] 秩父甲州脇往還 [江戸] 入間川舟運 [川越]・江戸、ほか	川越道 (松山-川越仙波)
操業	天保3年(1832)~明治20年(1887)頃	安政2年(1855)~
陶工・画工	(八右衛門) - 大原新平 (双木新平)・川口恒 右衛門・山本卯平 - 双木佐七 別紙	善六 (信楽陶工)、小竹庄八、野口和吉、服部 幸次
創業者	双木清吉 (天保14年、73才没)	横田彦兵衛 (万延元年・1860年没)
窯構造	7連房 (2.5×20m程度) 土盛・傾斜約20度 基数1基	本焼き窯: 7連房 (1房=幅5尺×横2間×高4 尺) 土盛、1基 素焼き窯 (楽焼窯): 高6尺×巾3尺、2基 (錦 窯)
製品	碗・坏、皿・鉢、土瓶・急須、徳利、鍋、釜 ほか (別紙)	茶碗、土瓶・急須、徳利、趣味の美術品、 茶器、建水、花瓶、水差し、糸取り鍋、土釜、土 鍋、蘭鉢、養蚕火鉢、素焼き土管、井戸側 未詳
釉薬	緑褐色釉、鉄釉 (少量)	
装飾	イッチン	貼付文
流通	江戸、川越、多摩	(上州)
関係窯	白子窯、矢嵐窯、荒神窯	

(3) 熊井焼の操業形態 - 関東・東北における近世地方窯の開窯形態から -

(主に伊藤正義ほか『東北の陶磁史』1990福島県立博物館をもとに)

a 江戸前期

- ・開窯の形態 国焼・御留窯型開窯
- ・陶工の在り方 ①来訪・招聘陶工、②本場派遣習得陶工
- ・窯の分布

東北南部に集中: [山形県]米沢市・戸長里窯跡 (16世紀末~17世紀前半)、[福島県]福島市・

岸窯跡（17世紀前半～中頃）、相馬市・相馬藩窯田代窯（17世紀前半～中頃）、会津若松市・会津大塚山窯（16世紀末～17世紀前半）、長沼町・長沼天神窯跡（17世紀前半）

※関東には未確認（御庭焼及び土器焼の今戸焼は除く）

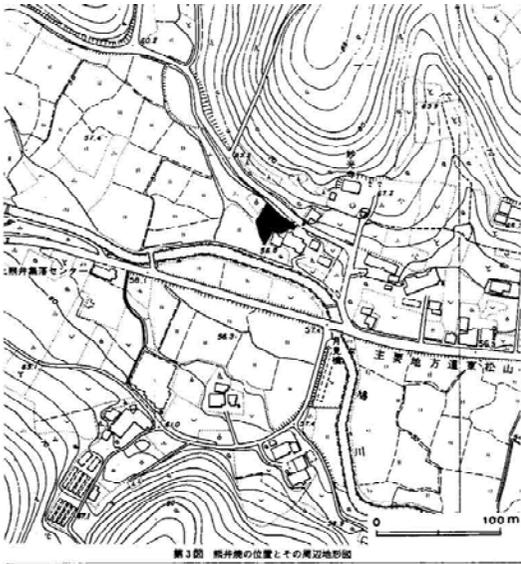
- ・技術系譜 ①瀬戸・美濃系：会津大塚山窯、長沼天神窯跡 ②唐津系：戸長里窯跡、岸窯跡 ③京焼系：相馬藩窯田代窯（ただし詳細不明）
 - ・流通範囲 ①狭域流通（城下とその周辺）～岸窯跡を除く全て（相馬藩窯田代窯は対象外） ②中域流通（隣国まで）～岸窯跡（福島市とその周辺から宮城県）
- ※関東・東北唯一の中域流通窯（地場産業窯）として操業（18世紀後半まで）

b 江戸中期－相馬大塚焼の場合－

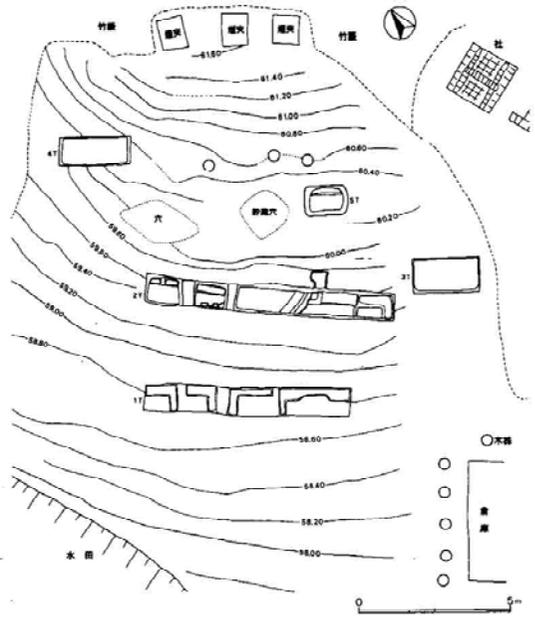
- ・開窯の形態 藩統制民需窯型開窯
- ・操業の内容 日常雑器の生産
- ・陶工の在り方 藩窯（田代窯）の陶工からの独立
- ・その他の開窯状況 18世紀前半代の開窯状況は、全般的に低調。※関東では18世紀後半から開窯の動きが見られる。

c 江戸後期

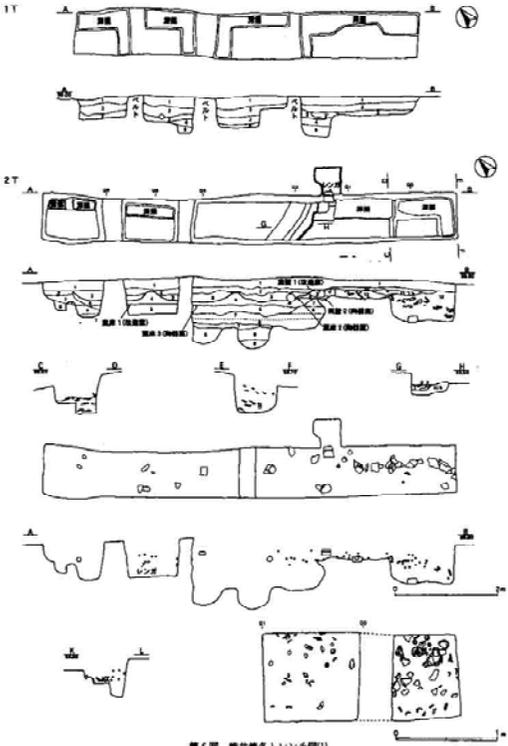
- ・開窯の形態 ①殖産興業に基づく藩窯型開窯 ②民間資本活用に基づく民窯型開窯
- ・操業の内容 ①日常雑器の生産 ②磁器生産の開始
- ・陶磁工の在り方
陶器の場合：①陶工の窯場からの独立 ②先進地からの陶工獲得
磁器の場合：①先進地での習得 ②技術者の獲得
- ・開窯状況 爆発的開窯（ただし東北に比べ関東は相対的に少ない）。ただし磁器窯は19世紀後半以降の開窯。 ※関東諸窯の開窯は当該期に集中。



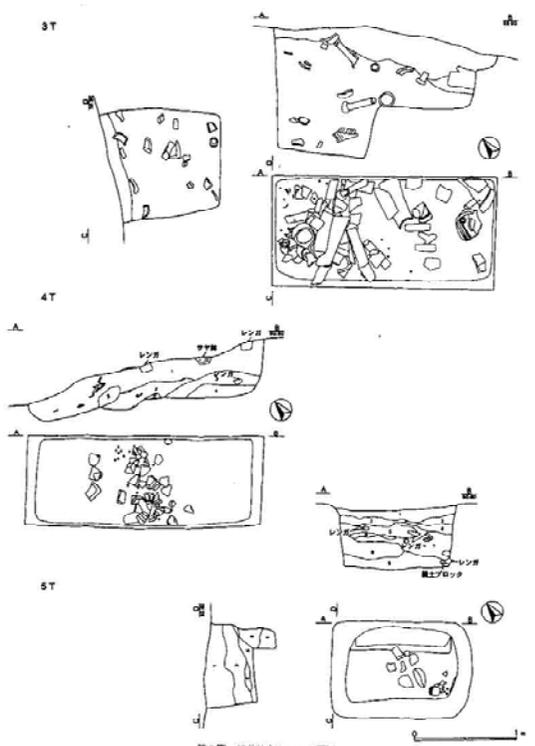
第3図 熊井遺跡の位置とその周辺地形図



第5図 熊井遺跡総観測量全体図



第6図 熊井遺跡各トレンチ図(1)



第7図 熊井遺跡各トレンチ図(2)

第5章 調査の成果と課題

第1節 熊井焼の操業年代

1 関係資料から見た操業年代と窯場の展開

第2表は、窯元に伝わる操業の経緯や操業年代を「熊井焼の歴史」として表にしたものである。一先ず確認調査の成果を措いた状態で、表から見ていきたい。なお表の典拠は、初代仙之助から4代豊三に至るまでの記事が、明治時代の内国博覧会に伴う『五品共進会内国博覧会陶器解説 上』（豊三報告）（註1）、『武蔵国郡村誌』（註2）に基づくもので、それ以降は現当主根岸一郎氏からの聞き取りと、6代茂平治を取材した昭和53年3月26日（日）の読売新聞の記事（「まちかど新風土記〈83〉鎌倉街道・鳩山『熊井焼』」）に基づくものである（関係記事を以下に掲載・再掲）。

資料1『五品共進会内国博覧会 陶器解説 上』

天明五年淡路国ノ産、医師沢玄堂ナル者アリテ、我家ニ寄留シ其人好デ染焼ヲ談ズ。時ニ祖父根岸仙之助、嘗テ該事ニ志アリ、之ニ依テ始メテ其伝ヲ得、之ヲ創業トス。然レドモ其業タル甚ダ僅少ニシテ只地方ニ販売スルノミナリシガ、文政二三年ノ頃ヨリ祖父根岸儀兵衛、更ニ本業ニ熱心スルモ猶ヲ染焼ニ過ギズ、天保末年ノ頃ヨリ父根岸喜一、肥前国ノ人山ノ口武七ナル者ヲ傭ヒ、大ニ本業ヲ起セシガ、原土配合其宜ヲ不得シテ失敗ヲ来タシ、為メニ破産廃業ニ垂ントスルニ際シ、事ノ成ラザルヲ憂ヒ躬ヲ京都ニ行キ、諸家ニ寄食スルコト一年余ニシテ、大ニ其述ヲ悟リ、即原土配合ニヨリ薬品ノ調整ニ到ル迄、悉ク試験改良ニ熱心シ、数回ノ経験ヲ成シ、漸ク本業ノ実ヲ得ルニ至レリ。」

（頭書 原土、本村宇能瀬ヶ沢、同郡玉川郷字門松）

第2表 熊井焼の歴史

初代 仙之助	2代 儀兵衛	3代 喜一	4代 豊三	5代 茂	6代 茂平治
1755年 (天明5年)	1819・20年 (文政2・3年)	1840年頃 (天明末年)	1885年 (明治18年)	1930年頃 (昭和初期)	1963年 (昭和38年)
染焼 淡路国医師より伝 習 実態不明（窯は桶 窯タイプ?）	染焼 実態不明 引き続き小規模操 業（窯は桶窯タイ プ?）	肥前国陶工来 焼成失敗 廃業寸前 京都で修行 事業再興（登窯）	事業拡大 明治初期：年間土 器一万五千個	それ以前に土管焼 成に転換 さらに瓦焼成に転 換（ダルマ窯か）	閉窯（瓦窯）

資料2『武蔵国郡村誌』『比企郡内十一村』『熊井村』

物産

米百六十石 生絹二百五十疋 生太織三十疋 土器一万五千個
釜石五十口 松板三十間 松棒二百四十駄 藁縄六千房
木炭三千八百五十俵 薪駄

資料1によれば、その歴史は、当地に立ち寄った淡路国の医師による染焼の伝授と言う。熊井焼の位置と環境で記述したように窯場の近傍を通る道は、慈光寺道として坂東三十三箇所札所巡りの巡礼街道に使われていたようで（巡礼中に亡くなった遠国者の供養碑がこの道沿いにある）、医師はそうした札所巡りの途次でもあったかと思われるが、真相は定かでない。創業当時から2代儀兵衛まではこの染焼で推移し、3代喜一に至って肥前焼陶工を雇い入れ、本格的な陶器生産に移行するが、粘土の配合などに問題を抱えたまま破産廃業状態に陥ってしまう。喜一は、この難局を打破すべく自ら京都に上って該地の窯業に学び、習得の後帰郷してさらに試験改良を試み、終に陶器焼成の再興を果たす。『武蔵国郡村誌』に載る記事は、この再興を物語る数字と考えられる。4代豊三の操業も、またこの数字を一つの基準とし、かつ3代のこの実績を発展的に受け継いだものであったのだろう。

6代茂平治を取材した新聞記事によれば、陶器操業の終わりは明治末年とある。陶窯廃止の具体的状況は、目下拠る資料がなく判然としないが、鳩山町に残された近代文書の諸家文書中には川越町の陶器商と今宿村（現鳩山町）商人との間で交換された「陶器通」ほかの陶器の商いに関する帳面が数帳残されており、その年代が明治

35年に始まり大正5年に及んでいる点が注目される。帳面には多種多様な陶器銘が記されており、川越から多量に買い付けた様子が伺える。多くの地方窯が明治にはいつて、瀬戸な肥前などの陶磁器に押され、廃業を余儀なくされているが(註3)、「陶器通」はまさにその状況を彷彿とさせる。熊井焼廃業の直接の原因だったと推測される。

陶器窯廃止以後、熊井焼は土管や瓦を焼く窯へと変わっていくが、陶器窯から土管窯、瓦窯への転換の具体的な状況及びその操業状況(特に土管窯の操業状況)は定かでない。聞き取り調査によれば、瓦窯は別地点で行なわれたことが確認された。またこの当時(昭和段階)、既に陶器窯の記憶は窯元からも大分薄らいでいたようである。瓦窯より時代の遡る土管造りをした具体的な期間、瓦窯との重複期間の如何をはじめ、陶器窯から瓦窯に至る200年間にわたる熊井焼の細部は定かでないが、現当主根岸一郎氏が、熊井焼6代目父茂平治の操業を手伝った根岸瓦窯が閉じられたのは、昭和38年であるという(現当主談)。

2 確認調査から見た操業状況(第31図)

上記操業にまつわる文献資料、伝聞等に対し、今回の確認調査で明らかになった点を対比して示すと以下の通りである。陶器段階と陶器以後に分けて書き上げてみたい。

陶器段階

①天明5年開窯については、確認調査では調査範囲(主に物原の調査深度)の関係から未確認であったこと。

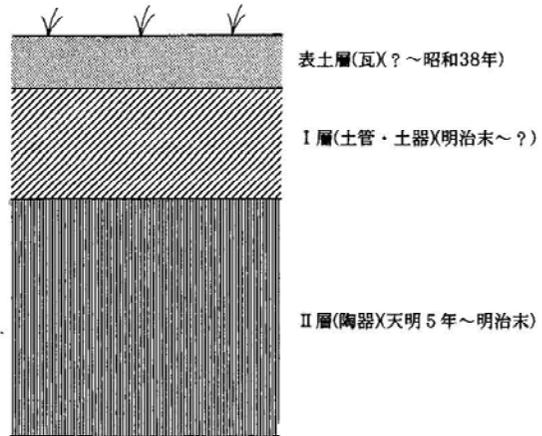
②開窯から2代まで(19世紀前半)は楽焼であった点は、少量ながらも出土例が確認されたこと。さらに物原を下げれば楽焼品が多く出土するだろうと予想されたこと。

③3代喜一が肥前国の陶工を雇い入れた点は、三島手や染め付け品の出土によって事実であった点が確認されたこと、そして原土配合不首尾による破産廃業状態云々に関しては、染め付けの発色不良品が定量出土したことで、記事通りであったかもしれないと想定されたこと。

④その後再興を期して京都で修行を積み以下の点は、京・信楽系のイチチン技法を多用していることで確認されたこと。

陶器以後

a 土管窯に移行した点は、物原調査によって陶器との



第31図 物原(3T)と操業過程対応模式図

上下関係及び出土量の多さから確認されたこと。

b 別地点で操業されたという瓦生産は、物原上層から瓦がやや多く出土した点と齟齬するが、灰原最上層であり、状況から見て別地点からの投棄として矛盾しないこと。

新たに確認された点には以下がある。

イ 各種土器類(赤焼き品類)が土管層から定量出土していること。

ロ 少量の瓦質製品が出土していること。

ハ 窯体用と考えられるレンガが物原に多量に投棄されていること。

この土器・瓦質類を別にすれば、以上から見て関係資料と確認調査の成果とは概ね一致することが理解された。したがって天明5年の開窯年代も実態のあるものと推測される。

ところで、『五品共進会内国博覧会 陶器解説 上』の記事には「祖父根岸仙之助、嘗て該事ニ志アリ」の一文がある。この記事と直接繋がらないが、町内の発掘調査事例(丘陵上の小規模建物群=虫草山遺跡)に白色針状物質を含む17世紀後半~18世紀前半と考えられる土器類が出土した例がある(第32図右下23、24)。胎土の特徴から鳩山町内で焼成していた可能性があるもので、谷筋は違うが地理的にも熊井焼と距離が近い点など、今後、熊井焼成立を論じる上の参考資料として記憶しておく必要があるものである。

房式登窯であったようである。東松山市の山王焼では15m6房の登窯が残されている(註9)。熊井焼3代以降の窯(登窯)は地形的制約から15m以下に復原される。19世紀前半以降閉窯までの原窯の様子は、原窯関連調査(註10)によって詳細が明らかにされているが、熊井焼の最盛期とそのその操業期間が平行関係にあるのが注目される。とりわけ施釉方法(灰釉主体)、装飾方法(イッチン技法)に多くの共通点が認められる点は、技術的交流を物語るもので今後検討を要する部分である。その際、関係史料の分析から固有名詞として窯場の人的組織の復原がなされている飯能焼原窯との対比は、先進地からの陶工や絵付師などの技術者招請をはじめとした窯場経営の比較を通じ、多くの成果を生むものと期待される(註11)。

他窯との比較でまた注目されるのは、筒形花生に採用する貼付文と装飾方法を共有する山王焼との比較である。その違いなどは、口作りなどですでに指摘されているが(註12)、比較検討を他の製品に広げていく必要がある。

3 陶器窯以後の土器・瓦生産—5代から6代までの状況—

さらに山王焼との比較は、陶器以後の土管・土器の焼成段階、瓦生産付随品と想定される各種瓦質土器の焼成段階でも必要である。この明治から昭和にかけての窯場の様子が記録に留められている山王焼によって、当該期の製品の需用や流通の一端を知ることができるからである(註13)。その操業内容は、熊井焼にも援用できるものとする。

土器や瓦質土器の焼成は、19世紀以降に成立する深谷市の大沼焼(註14)や東村山市のヒバチヤ(註15)などに代表される、江戸の今戸焼系統といわれる昇焰窯(土器窯)による焼き物生産の拡散の問題にも絡む。第2次熊井焼とも言うべきその改造窯や瓦窯の構造復原が要請される場所である。

4 まとめと課題

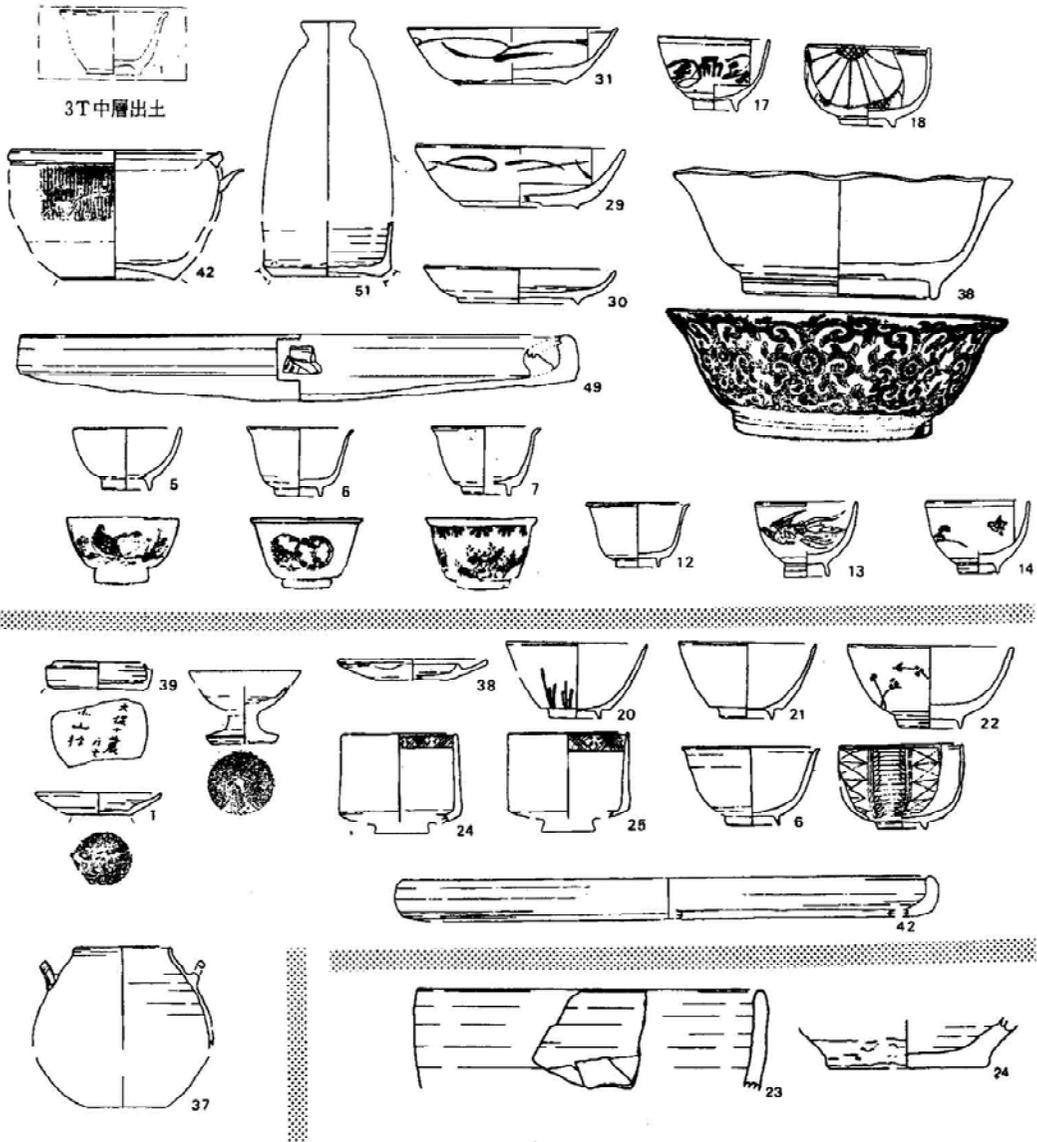
以上をまとめると、①楽焼による開窯は、その開窯時期を含め、青梅諸窯と類似している点、②連房式登窯による本格的な陶器生産は、飯能焼や山王焼と横並びであること、③その廃窯も飯能焼原窯が少し先行するが、近い年代であること(明治後半～末)、④陶器窯の廃窯後の

土管・土器に転換するあり方が、山王焼などと似ていることを確認できた点、などとなる。

課題は、主な点を上げると、イ開窯の背景(時代的、地域的背景)が不明であること、口流通が狭域か中域かが今後検証されていかなければならないこと、八地方窯と幕藩体制化の支配関係(所謂藩窯か民窯など)が古文書調査などから詰めていかなければならないこと、ニ土管・土器生産の技術系譜が判然としないこと、ホ瓦窯の窯体構造の把握が必要であること、などである。

註

- 1 『五品共進会内国博覧会 陶器解説 上』陶磁文献刊行会 1968年
- 2 『武蔵国郡誌』埼玉県立図書館発行 1953年
- 3 中ノ堂一信『近代窯業の展開』『講座・日本技術の社会史 第4巻 窯業』
- 4 a 『日本のやきもの集成1 北海道 東北 関東』平凡社 1981年
b 『江戸時代後期における青梅の焼物』『多摩のあゆみ』102 特集多摩の産業遺産 2001年
- 5 同註4 b
- 6 同註4 b
- 7 a 『飯能市史』通史編 1988年
b 『飯能焼』飯能市郷土館 1994年、ほか
- 8 栗原伸二郎『飯能焼と白子焼』『飯能の文化財』第2号(飯能焼号)1962年
- 9 「文化財展資料 山王焼やきものの由来(解説)」東松山市教育委員会 1994年
- 10 富元久美子『飯能の遺跡(27) 飯能焼原窯跡第1・2次調査』飯能市教育委員会 1999年
- 11 a 同註8
b 浅身徳男『飯能焼』陶工の系譜『埼玉地方史』第9号 1980年
c 同註7 b
- 12 内藤勝雄『熊井焼と山王焼』『紀要第5号』埼玉県立博物館
- 13 横田喜一・俊夫『武蔵山王焼について』私家版(発行横田隆史 1976年)
- 14 『深谷市史』1969年
- 15 内野 正『近世末から近代における多摩地域の土器生産—武蔵村山市中藤ヒバチヤ田口家の調査を中心にして—』『多摩のあゆみ』102 特集多摩の産業遺産 2001年



上段天神台遺跡第3次1号土坑、中段同第2次1号竪穴状遺構、右ト虫草山遺跡グリット 0 10cm

第32図 熊井焼共伴遺物集成図

3 熊井焼の共伴事例 (第32図)

鳩山町の発掘調査事例中、次年度以降遺跡整理予定に熊井焼との共伴事例を複数確認できる発掘調査例があるが(宿遺跡)、ここではこの宿遺跡に近い寺院の建替えに伴う発掘調査事例(天神台遺跡第2次・3次)から、共伴事例と参考事例を1例ずつ紹介する(第32図)。

共伴事例(3次1号土坑、第32図上段)は、熊井焼の鍋(42)、徳利(51)に肥前の染め付けほかが付出する。染め付けは、筆描きの古手(29、31ほか)から型紙刷りの新手(38ほか未掲図多種あり)まであり、熊井焼はこの時間幅に納まることになる。なお49の焙烙も熊井焼の可能性が有る。

参考事例（2次1号竪穴状遺構、第32図中段）は、天保15年(1844)の年紀銘のある白磁合子に各産地が共伴する例で、3次1号土坑の年代観の参考となるものである。

以上の事例は、年代的には19世紀中頃からその前後を示していると考えられる。熊井焼の操業年代の1点とすることができる。

なお第32図の枠で囲った内面縁がかかった白磁有台小坏(1)は、熊井焼跡3 T物原中層(II層)出土の他窯の製品(肥前か)である。同じ上段の12と同じ手で高台や腰作りに若干の相違が認められる。

第2節 武蔵国近世窯における

熊井焼の位置(第33図、第3表)

ここでは武蔵国近世窯における熊井焼の位置について概観しておきたい。とくに熊井焼と飯能焼の関係は、その区別が難しいほど大変似ていることもあり(これまで余り知られていなかったことであったが)、その相対的位置に言及しておくことは、両者の比較検討をはじめ未だ課題の多い段階であるにしても、将来のために必要なことである。

1 関東地方近世窯の開窯—初代から2代までの状況—

第3表は先行研究をもとに武蔵国の近世窯を一覧としたものである。江戸後期開窯は、武蔵国に限らない関東近世窯(陶器窯)の一般的な開窯時期である。特に天明頃が多い(笠間焼、熊井焼、川辺焼)(註4)。したがって熊井焼の開窯時期は、関東地方では古いことが分かる。

この開窯期の操業状態を発掘調査によって明らかにしたものに青梅市の川辺焼がある(註5)。ここでは無花果形の小形窯(焼成部円形の昇焰窯)と同窯焼成による楽焼製品を検出している。焼成器種も共通しており、熊井焼の初代から2代の楽焼時代も同様の小形窯であったのか、興味深いところである。さらに天平窯からも同様の小形窯が検出されており、19世紀前半ころの楽焼焼成状況の一端を物語っている(註6)。

2 武蔵国における連房式登窯での操業—3代から4代までの操業—

19世紀前半の天保年間を迎えると、飯能諸窯が開窯する(註7)(関東では益子焼など)。当該期の窯の発掘調査事例は武蔵諸窯にはないが、飯能焼原窯(原焼)の開き取り調査に基づく窯場復原図が報告されている(註8)。それによれば、土盛り上に7房の長さ19mを測る連

第3表 武蔵国近世窯一覧(御庭焼は除く)

番号	窯跡名	所在地	操業期間	その他
1	熊井焼	鳩山町	天明5年(1785)～昭和38年	陶器は明治末年まで。以後土管・土器・瓦など。
2	秋山焼	児玉町	幕末～明治初年か	
3	大沼焼	深谷市	幕末～明治初年か	
4	山王焼	東松山市	安政6年(1859)～	
5	秩父焼	秩父市	幕末頃か	
6	横手焼	日高市	江戸中期頃か	
7	原焼	飯能市	天保3年(1832)～明治20年(1887)	
8	矢風焼	飯能市	天保年間(1832～44)以前か	
9	白子焼	飯能市	幕末～明治初年か	
10	玉川焼	稲城市	文化・文政年間から明治中期まで	
11	川辺焼	青梅市	天明・寛政(1781～1800)頃か	
12	天平焼	青梅市	文政11年(1828)～	
13	茶堂焼	青梅市	幕末～明治初年か	
14	玉川焼	稲城市	文化・文政年間から明治中期まで	

出典(註4a、4b、7b)より調整して作成。